

古社の歩み

生尾を歩く

匝瑳探訪

- 77 -

近ごろ「匝瑳市」が難読・誤読地名として話題にされているようで、確かにむずかしいという印象はあります。

「匝瑳」という地名は741年の記録に見られる郡名で、930年代にまとめられた全国の国郡郷の中、下総国11郡のうち匝瑳郡は最大の18郷で成り立っていました。郷は地方行政の単位で、18郷のひとつ匝瑳郷は現在老尾神社のまつられる生尾区周辺地域と考えられます。

927年に当時の「官社」とされていた全国の神社一覧に、下総国11社（下総国式内社）の中に香取神宮（香取市）とともに匝瑳郡の「老尾神

社」が載っています。

つまり700年代から930年代にかけての広範囲な匝瑳郡の中心地が生尾区の地域だったといえるでしょう。

ではなぜ同神社が古代の官社になったのでしょうか。同神社には、匝瑳郡を開いたとされる物部匝瑳氏の先祖・小事をまつったという言い伝えがあります。物部匝瑳氏の動きが記録されているのは、810年代から840年代にかけてのことで、社伝に結びつくものでしょう。

こうした由緒をもつ老尾神社ですが時代が移り変わる中で、「匝瑳大明神」「生尾山大明神」などとも呼ばれ、江戸

時代末期から明治初めにかけては生尾村20戸足らずの氏子で神社を守ってきました。

明治時代になり新政府の進める政策の中で、老尾神社に変化がもたらされました。1871年の近代社格制度により、老尾神社は2年後に「郷社」となりました。郷社は県社に次ぐ社格で、匝瑳郡内の各村むら68か村の神社をまとめ役も担う総鎮守となったのも古くからの由緒によるものでしょう。

その後しだいに郷社にふさわしい氏子たちの信仰心も薄れていく中で、戦後の1946年にGHQの神道指令によって神社の国家管理廃止に伴って社格制度も廃止されました。

ところで、現在地名として「生尾」が使われていますが、「老」の字をきらって「生」に改めたとされています。

神社名に関しては「老尾神社」を「ロウヒ」神社という呼び方をされることがありますが、927年の正式な記録には「オイヲ」と表記されていますので、「オイヲ」神社の方がふさわしいといえます。

岡秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



鳥居から老尾神社を望む